

# A 日 程

〈出典一覧〉

国語	富士川義之	「翻訳の魔力」(『翻訳家の仕事』所収)	岩波書店
国語	中野幸一 校注・訳	「あて宮」(『うつほ物語②』新編日本古典文学全集 15 所収)	小学館
国語	伊藤亜紗	「序」(『手の倫理』所収)	講談社
日本史	川尻秋生	平安京遷都〈シリーズ日本古代史 5〉	岩波書店

問 8

⑥「ケアとは何か」という問題とあるが、「ふれる」「さわる」の違いはなぜこの問題と関わるのか、その理由と  
 してもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 45

- ア ケアの本質は相手を人として尊重するところにあるから
- イ ケアにおいては相手の自分に対する要望を正確に判断する必要があるから
- ウ ケアの場面では人間の身体を対象とし、身体同士の接触が必至であるから
- エ ケアでは接触面から自分の相手に対する態度が判ってしまうから
- オ 「ふれる」と「さわる」を混同するようではケアとは言えないから

- 25 -

問 9

本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 46～50

- 46 私たちは「ふれる」と「さわる」を状況に応じて使い分けているが、怪我の手当てをするときや窓を開けて外  
 気を呼び入れた時などは「さわる」ではなく「ふれる」を使う
- 47 著者は、哲学者の坂節恵の論を引用した上で、「ふれる」と「さわる」のちがいについて、接触面に生じる関  
 係性において人間的吗どうか、物的であるかどうかで説明している
- 48 医師が患者を触診する際に、相手を人間ではなく科学の対象として見ているという態度を表明するために「さ  
 わる」を使う方が自然だが、それは必ずしも悪いことではない
- 49 「ふれる」と「さわる」は行為する主体の心づもりに関わらず容易に入れ替わるため、人を物のように「さわ  
 る」ことや、物に人のように「ふれる」ことが起きてしまう
- 50 著者が接触面には「人間関係」があると述べるのは、接触する側の意図や目的だけが問題ではなく、接触  
 される側も相手の自分に対する姿勢を敏感に推し量ろうとするからである

- 26 -

(伊藤亜紗『手の倫理』)

問1 a・bの読みをひらがなで記しなさい。解答番号は a | 37 b | 38

- 37 a 逆鱗
- 38 b 看取り

問2 空欄 A から D にはいる語の順序として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 39

- ア では―たとえば―もっとも―つまり
- イ たとえば―もっとも―では―つまり
- ウ では―つまり―もっとも―たとえば
- エ つまり―では―たとえば―もっとも
- オ たとえば―では―つまり―もっとも

問3 ① 痛いかもしれないけど、ちょっと我慢してみようかなという気になる。とあるが、なぜそのような気になると考えられるか、その理由としてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 40

- ア 専門的な知識をもって適切に処置してもらえそうだから
- イ ある程度の痛みも我慢しないと治療にならないから
- ウ 親切を拒否するのは相手に申し訳ないと思うから
- エ 自分に対する相手の理解と愛情を感じられるから
- オ こちらの痛みが配慮してくれると感じるから

問4 この通り<sup>②</sup>とあるが、「ふれる」が使われる場合は主にどのような場合か、三十五字以内で「ふれる」はに始まり「場合に使われる」につながる形で答えなさい。解答番号は 41

問5 ③ ふれるという体験にある相互<sup>かたむき</sup>嵌入の契機<sup>かぎ</sup>とあるが、この部分の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 42

- ア 接触することによって、自分と相手とが人間的に深くかわるようになるかも知れないこと
- イ 接断面を通じて、相手と自分を区別なく対等に扱うようなきつかけを得ること
- ウ 接触したことによって、自分よりも相手を尊重するような態度を身につけること
- エ 接触するということは、相手のいのに触れてたがいの幸福感に影響を与えるということ
- オ 接触してしまつた後には、自分と相手は好悪に関わらず結びつけられてしまつたということ

問6 ④ 物のように扱うことが、必ずしも「悪」とも限りませんとあるが、この場合の例として適当ではないものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 43

- ア 歯科衛生士による予防処置
- イ 柔道の試合における組み手
- ウ 運動選手に対するマッサージ
- エ 服をあつらえるための採寸
- オ 空港の保安検査でのボディチェック

問7 ⑤ 相手が人間でないからといって、必ずしもかわりが非人間的であるとは限りませんとあるがそれはなぜか、その理由としてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 44

- ア 物であっても人に対するときのように大切に扱うことはあるから
- イ 物を慎重に扱おうとするかどうか人間性の有無が問われるから
- ウ 物のむこうにはつねに作り手の存在が透視されるから
- エ じっくりしきをもつて対すれば事物もそれに応えようとするから
- オ 非人間的なかわりは相手が人間であっても成り立つから

問 9

本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は ㉓～㉕

- ㉓ 大宮はあて宮の東宮入内の慌ただしさの中でも、侍従の君を大切にし看病をしていた
- ㉔ あて宮の容貌は、侍従の君の目から見ても非の打ち所がないほど美しい盛りだった
- ㉕ あて宮は侍従の君の歌が書かれた紙を懐にしまって、内容が人に知られないようにした
- ㉖ 侍従の君はあて宮が立ち去ったのを見届けてから、危篤状態になり絶命してしまった
- ㉗ 大宮とおとどの関心は侍従の君の病状よりも、あて宮の東宮入内を達成させることにあった

問 10

『うつほ物語』よりも先に成立した作品の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ㉘

- ア 枕草子
- イ 古今和歌集
- ウ 源氏物語
- エ 和泉式部日記
- オ 栄花物語

第三問 【選択問題 現代文】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

著作権上の理由から削除

問1 ① 今日(は)の後に省略されている内容を補った場合、どのような文が続くか、もっとも適切なものを次の中から選  
び、その記号をマークしなさい。解答番号は 20

- ア 限りさぶらふ
- イ 限りにあらむ
- ウ 限りある道なり
- エ 限りにあらず
- オ 限り知られぬ

問2 ② 問「こえ」③ はそれぞれ誰に対して「聞こゆ」を用いているか、もっとも適切なものをそれぞれ次の中から  
選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ② | 21 ③ | 22

- ア 東宮
- イ 侍従の君
- ウ おとと
- エ 宮
- オ あて宮

問3 ④ 御送りをだにえ仕りまつらざるなりぬるの解釈として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマー  
クしなさい。解答番号は 23

- ア せめて大宮と共にあなたの御殿からお見送りするはずでしたのに、病の為に何ごともできなくなってしま  
いました
- イ せめて私の旅立ちを見送っていただきたく思いましたのに、あなたが先に立たされるので叶わなくなってしま  
いました
- ウ せめて宮中へのお見送りだけでもと思いましたが、入内の時にお仕えすることができなくなってしまいま  
した
- エ せめて御装束を整えてお見送りたいと思いましたが、病の為にご用意することもできなくなってしまいま  
しました
- オ せめて兵衛の君と孫王の君だけでもお見送りにと思いましたが、御供にお仕えすることができなくなって  
しまいました

問4 ⑤ え侍るまじきにこ侍るぬれの解釈として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしな  
さい。解答番号は 24

- ア 死ぬのだからと思います
- イ お仕えするだろうと思います
- ウ 対面するだろうと思います
- エ 生きているだろうと思います
- オ 心残りであろうと思います

問5 ⑥ あて宮、さな思し入りそ」とて立ちたまふを誰に對することはかがわかるように現代語訳しなさい。解答番  
号は 25

問6 ⑦ 臥しまろびからくれなゐに泣き流す涙の川にたぎる胸の火の和歌の技法について、和歌の中からあてはまる語  
を抜き出し、次の文章を完成させなさい。解答番号は A | 26 B | 27 C | 28

A には、水が激しく流れる意、沸きかえる意があり、それぞれ B と C に掛けている。

問7 ⑧ なむと同じ用法のものとして、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番  
号は 29

- ア わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむと思ふ
- イ 桜花散らば散らなむ散らずとてふるさと人の来ても見なくに
- ウ 年ごろよく比べつる人々なむ別れがたく思ひて
- エ まかなしみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか
- オ 若宮など生ひ出で給はば、さるべきついでもありなむ

問8 ⑨ 「あながま」の語の意味として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番  
号は 30

- ア あきれる
- イ うるさい
- ウ 心外である
- エ 大げさだ
- オ 気が散る

(一) 次の問いに答えなさい。

問1 次の傍線部に相当する漢字を含むものを、それぞれ各群のア～エの中から一つずつ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は15～17

- 15 撤退をヨリなくされる
- ア ユウイギな時間を過す
- イ 提案に対し、イギを唱える
- ウ レイギ正しく振る舞う
- エ 室内ユウギで楽しむ
- 16 鋭いドウツツ力に驚く
- ア 考え方にサンドウする
- イ 心のドウヨウを隠せない
- ウ 係員がゴウドウする
- エ 中がクワドウになつてゐる
- 17 大学でツチカつた友情
- ア 観葉植物をサイバイする
- イ 格安でハンバイする
- ウ 収入がバツイウする
- エ 電子バイタイを活用する

問2 次の各文の空欄にはいるものを、それぞれア～オの中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は18・19

- 18 大  X  なく任務を終え、安堵する。
- ア 過
- イ 火
- ウ 果
- エ 化
- オ 可
- 19 「四面楚歌」の類義語は  Y  である。
- ア 千差万別
- イ 孤立無援
- ウ 同工異曲
- エ 捲土重来
- オ 呉越同舟

第二問【読解問題 古文】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、\*印の付いた語句については、注を参照しなさい。  
〔これまでのあらすじ〕

源正頼（おとど）と大宮（おほのみや）の娘あて宮は東宮妃として入内することになる。かねてから体調が思わしくなかったあて宮の兄の仲澄（侍従の君）は、入内の日にあて宮との別れを悲しむ。

かかるほどに、「侍従の君、\*人面も知らず、口惜しうなりぬ」とのしる。宮、おとど、かつは思ひ騒ぎ、かつは参りのこと思し急ぐ。大宮、局にさしのぞきたまひて、「ただ今はいかにぞや、この御参りのことどもものすとて、見たてまつらずや、侍従「限りにこそあめれ、今一度、かの御方に対面を賜はらずなりぬること」と聞こゆ。宮、「あなゆしや、などかあらむ。さまれ「今ものしたまへ」と、さもせむかし、今日思へど、あないみや」とて、涙を流したまひて、あて宮に、「侍従の、いと心細くものしつるを、渡りて見たまへ。もの初めに、いとうたてと思へど、対面せむものしつれば、などのたまふ。

あて宮、心憂しとは思せど、宮、「聞こえたまへば渡りたまふ。宮、おとどの住みたまふ北のおとどに臥したまへり。あて宮、その頃、御かたちの盛りなり。丈五尺に今少し足らぬほど、いみじく姿をかしげに、御髪のおろはしくをかしげに、清なる黒紫の絹を巻せること、生ひたる限り、未まで至らぬ筋なし。めでたきこと限りなし。今日ほまして、心殊に見えたまふ。兵衛の君、孫王の君ばかり御供にておはしたり。

侍従の君、見たてまつりたまひて、とみにも聞こえたまはず。からうして、「今日や参りたまふ。御送りをだにえ仕うまつらずなりぬること。生きてまた対面賜はらむこと、難くもあるかな」と、涙を流して聞こゆ。あて宮、「心にもあらずのみなむ。

いでや、などかはかくのみはものしたまはむ。「侍従、」なほ、え侍るまじきにこそ侍るめれ、よろづのこと、心細く悲しきこと」と聞こゆ。あて宮、「さな思し入りぞ」とて立ちたまふ。

臥しまるびからくれなゐに泣き流す涙の川にたぎる胸の火と書きて、小さく押しもみて、御襟に投げ入る。あて宮、散らさじと思して、取りて立ちたまひぬるを見るまに、絶え入りて息もせず。

宮、おとど、あるが中にも愛しき子のかかるよりも、よろづの故障をのきて思ひ立たまへる御参り延びむこと、この度せずなりなば、つひにせずなりがむこと、と思すに、ただ感ひに感ひたまふ。あななま、しほしものないひで、とて、君たち、男、女、集ひたまひて感ひ騒ぎたまふをも知らず、外には御車どもを装束を設けたり。みな人ものも覚えず、賢しき人もなし。

（「うつほ物語」）

注  
\*人面も知らず……………周囲の人の顔も見分けられなくなった。  
\*騒ぎせる……………黒髪がつややかに光る。  
\*兵衛の君、孫王の君……………あて宮づきの女房。



第一問 共通問題 現代文

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、\*印の付いた語句については、注を参照しなさい。

凝った、複雑で美的感覚のあふれる文章を読むことが好きである。どうして好きになったかを振り返ってみると、年少の頃に谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介、萩原朔太郎などを読みふけた読書経験まで遡ることができるだろう。同時に島崎藤村や志賀直哉を読むことは読んだが、あまり親しみを感ぜなかった。なぜそうなのか、自分ともいまだよく分かっていないところがあるが、良かれ悪しかれ、十代に耽溺した主として大正期の唯美主義的な詩や小説を通じて自分の文学的感性の基盤が形づくられたことを認めざるをえない。

後年、翻訳に興味をもち、翻訳の仕事に携わるようになる。ボーからライターやワイルド、ナボコフやダレルからライターやパイアットなどといった作家たちを遊ぶのは、おそくそうした文学的感性のひそかな後押しがあったことに違いない。もちろん翻訳の仕事には通常さまざまな世俗的な事情がからんでくるから、文学的感性などといった、ひどくあいまいな事柄だけで実行できるはずもない。だが、わたしとしては自分の文学的感性に忠実でありたいとする心がまをすのねに保持して、いたいと願っている。注文があれば、自分の感性に逆らってまで何でも翻訳するという、いわゆる X になることだけはつとめて避けてきたつもりである。

たぶんそのせいだろうか、「きみは好んで難物ばかりを翻訳するね」と一度ならず友人や知人たちに言われたことがある。難物の翻訳家というあまり有難くないレッテルを貼られているようだが、確かに難物には進まないけれど、翻訳に没頭しているときには、ともかく明晰で、理解可能な、普通の日本語に置き換えるにはどうすればよいか、ということばかりが念頭にあって、とんでもない難物を引き受けてしまったとはほそをかわいようなことはめつたにない。複雑な構法を解きほぐし、的確な訳文を紡ぎ出すこと

とはまことに骨の折れる作業ではあるが、それ以上に、ひどく凝った、美しい精緻な文章を訳出することによってどういふわけか強く魅せられている自分にかと気づくことがある。そのような自分に何となく引き寄せられ、そのよきな自分に何となく励まされて、ともかくも最後まで訳しおえたときの一種の解放感というか、達成感をまた味わいたくて、性懲りもなく翻訳をしてきた。それが翻訳者としてのわたしが歩んできた長い道のりではなかったか、そんなふうにも思うことがある。

ところで小説を翻訳するさい、最初のうちは思うようにはかからないのに、いったん文体が定まってくると、とりわけ最後の三分の近くまで辿り着くと、にわかには翻訳作業の速度が加速する仕がある。まれではあるが、ほとんどもど一気呵成に仕上げたこともある。あれは一体何だったのだろうか、あとで思い返してみると、折にふれて感じるのは、長篇小説を読み上げるとききの感触に何だか似ている、ということである。名作と呼ばれる長篇小説でも、それを読みはじめたばかりの段階では、必ずしも取っ付きが良いとはかぎらない。しかし何となくか我儘しながら数十ページも読みすすめると、不意に眼前の視界がぱっと開けるように、読書の速度が次第に早くなり、ページを繰るのもどかしなくいくいく、先へ先へと読みすすめることを強く促す圧倒的な力にとらえられてしまうことがある。かつてディケンズやドストエフスキートの長篇を読んだときがそうだった。ある時点から翻訳作業の速度が加速するとき、あとで思い返すのは、そのような読書経験との類似性である。ある翻訳家の友人はひどい腰痛のため仕方なく風の上に腹ばいになったまま翻訳をつづけたという。腹ばいの姿勢のままでも翻訳の筆を走らせずにはいらぬ強い牽引力にとらえられてしまったからだ。

これとは全く逆にまるで金縛りにでもあったように、遅々として翻訳がすすまないこともある。構文や単語の意味は何とか把握しているのに、いつこうに訳文を作成できない、そのような経験を何度かしたことがある。いちばん印象に残っているのは、十数年前にアンジェラ・カターの短編集『血染めの部屋』(筑摩書房)の翻訳にかかわっていたときのこと。これを訳して、いざよき、というわけか気分が不安定になったり、ときどき背中や足に冷気を浴びたような不安感を襲われるのである。怪談めいた話が少なくないから作者の技量の研ぎに感嘆すべきところなのだが、どうもそんな気持になれそうにもない。何だかこちらの無意識の領域ま

でじわじわと浸透してゆくような、そんな不穏な気分すら感じられるのである。わたしは翻訳の仕事の最中は低い音量で CD を流していることが多い。仕事がかさねるような気がするからだ(原稿執筆のさいは違う)。たいていビョウ・曲や室内楽をかけるのだが、このときはいくら曲目を変えても効果があらわれない。いつもかけているモーツァルトやシューベルトでも駄目なのだ。そこでふだんはあまり聴かないパツハのオルガン曲やパイオリン協奏曲やマタイ受難曲などをかけると、これがほとんど劇的に効いたのである。それまで滞りがちだった作業が不思議なことにかなりスムーズに運ぶようになったのだから。

あれは一体どういうことだったのかと自問するとき、思い浮かぶのは、パツハがいわば言葉使いの役目を果たしてくれたのではないかと、ということである。そうした奇妙な経験を経ているせいもあるが、『血染めの部屋』は大層印象深い作品ではあるものの、決して出来のよい翻訳だとは思えない。ところがこれが意外に評判が良くて、いまだに少数の熱心な読者(とくに女性)がいるのである。ある SF 評論家(女性)からはライターをもっと訳してほしいと頼まれるのだが、これまでずっとためらっているのは、この作家が嫌いになったわけではなく、すさまじい牽引力をもつ彼女の文体の魔力に自分が耐えられるだろうかということに、一抹の不安を抱いているからである。

もちろんこんなことはそう頻繁に起るわけではない。しかし、文学の翻訳はときとしてそういう魔力を伴うものでもあることを、わたしは翻訳の仕事を通じて知るのである。振り返ってみると、昂揚、停滞、いづれの経験によ、そのとき翻訳者としてのわたしは作者の声と出会い、それに同調、または抵抗していたのではないかと、思うことがある。

一般に文学作品は文章と文体から構成されているが、文章がもつばら直感や感覚的表現の領域にかかわるものであるとすれば、文体はそうした文章をしっかりと支える理念や思想の領域に深く根ざすものである。作者の声というのは文章と文体の結合から生じる一種不可解な、ほとんど神秘的な、以前に愛読した哲学者 S・K・ランガーに倣って言えば、「虚の仮象」にほかならない。「創作されたものは、構成され形づくられた、新しい人間経験の仮象である」(『芸術とは何か』岩波新書)。

「新しい人間経験の仮象」としての作者の声に耳をすまし、それを母国語を通じて可能なかぎり再現すること、これはむろん容易に達成できることではない。至難のわざと言っても過言ではない。だが、わたしにとって、至難のわざであればこそ翻訳の楽しみも一層増えるというものである。

注  
\*統語法………言語学用語。単語を組み合わせる文法規則の総体。  
\*仮象………哲学用語。実在の対象を反映しているように見えながら対応すべき客観的実在を有しない主観的な形象。

- 問1 a・bの読みをひらがなで記しなさい。解答番号は a 1 b 2
- 1 耽溺 a
- 2 繰る b
- 問2 芥川龍之介の作品を次の中から二つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 3
- A 清兵衛と瓢箪
- I 青猫
- ウ 河童
- エ 田園の憂鬱
- オ 侏儒の言葉